

名古屋市博物館だより

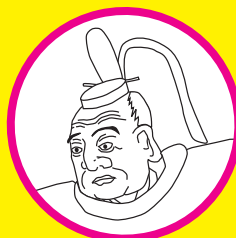
編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成26(2014)年10月1日発行 (年4回1・4・7・10月)

3,800部発行 無料

古紙ハルバ配合再生紙使用

徳川家康



平成26年度名古屋市博物館特別展

さんえいけつとナゴヤ 10/25 土 → 11/30 日

三英傑と名古屋

世界一、
大きな金貨

天正大判 名古屋市博物館蔵

愛知県出身の戦国武将といった時、愛知県に縁のある人ならば、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3名をあげるでしょう。彼らは「三英傑」と呼ばれ、日本の歴史を語るうえで欠かせない人物です。

今回、この三英傑にスポットをあてた展覧会を企画しました。戦国の世を天下統一に向けて歩んだ彼らの道のりを年代順にわかりやすく紹介します。名古屋市博物館が40年にわたって集めてきた文書、絵画、武具を中心に、地元である名古屋や愛知との関連についても展示します。

子どもから大人まで、戦国時代がよくわかる展覧会「三英傑と名古屋」をぜひお楽しみください。

休館日 | 10月27日(月)、28日(火)、11月4日(火)、10日(月)、17日(月)、25日(火)

開館時間 | 午前9時30分→午後5時 (入場は午後4時30分まで)

主催 | 名古屋市博物館 中日新聞社 日本経済新聞社

協賛 | 愛知トヨタ自動車株式会社

観覧料 | 一般 800 (600) 円、高大生 400 (200) 円、中学生以下無料

※() 内は20名以上の団体料金

小牧長久手の戦い

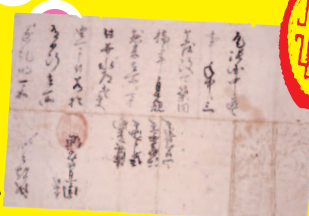
小牧長久手合戦図屏風(部分)
名古屋市博物館蔵

豊臣秀吉

長篠の戦い

長篠合戦図屏風(部分)
名古屋市博物館蔵

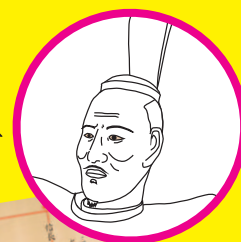
天下布武



織田信長朱印状 個人蔵

年代順だから、
よくわかる。

信長



織田信長

織田系図 個人蔵

桶狭間のほうび



盃 個人蔵

家康のひな人形



雛人形 個人蔵

平成26年度名古屋市博物館特別展 三英傑と名古屋への道…。

いざ、出陣



平成26年秋の名古屋市博物館は、三英傑をテーマにした展示です。名古屋市博物館が40年かけて集めた資料をもとに、郷土の武将、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康をメインとした構成です。私も歴史を担当する学芸員ですから、燃えない訳がありません。さあ、魅力的な展示とすべく、いざ、出陣と参りましょう。

展示コンセプト

今回は、こどもから大人まで、戦国時代をわかりやすく伝えることが目標です。資料を年代順に並べることで、来館者が、歴史上の事件や戦い、政策などを頭の中でストーリー化しやすいようにしなければなりません。

展示で扱う年代は、戦国時代から、元和6年(1620)の尾張藩初代藩主、徳川義直の治世が始まる100年ほどです。三英傑関わった主要な合戦をとりあげる他、その時々の中古屋の様子を紹介し、最後は家康が築いた名古屋城下と初代藩主義直で締めくくるものです。

よみがえる悪夢

さあ、実際に準備にとりかかろうと、この100年の年表に目を通しはじめた時です。なにやら、いやな予感がしてきました。これまでの経験上、展示準備が順調に進むことなど、まず、ありませんが、今回のいやな予感は過去最大級の感じです。どうやら原因は、次々と出てくる武将とその人間関係にあるようです。例えば、織田一族にも様々な家があり、尾張の守護代をつとめた織田敏定や織田敏広がいること。さらに一族は一枚岩ではなく両者は争っていたことなど。似たような名前が次々と現れ、敵味方入り乱れていく様子は、「漢字と人間関係が複雑だから日本史はいやだな。」と思った浪人時代を思い出してしまいます。実際、受験で世界史を選択し、大学では近世民衆史を専攻したのですから、その苦手意識は相当なものです。きつと、この日より発行される10月1日の段階でも、毎晩悪夢にうなされていることでしょう。

それでも学芸員は…

じゃあ、苦手だから、この分野はやらなくていいのか?というほど仕事は甘くありません。戦国時代を扱う事業はたくさんあり、携わらなければならないのです。例えば、火縄銃の出前授業。小学校に出向いて、火縄銃や、それにまつわる戦国時代の歴史を教えるのですが、小学生達のきらきらした目を見ると、自分もがんばらなくてはと、思い知らされます。「戦場で、火縄銃のどこが有効だったの?」「火縄銃を手に入れるためにどうしたの?」こどもたちにいろいろ考えてもらうちに、歴史とは、資料をもとに考える学問だと、改めて認識しました。考えるから発見があり、おもしろいのです。できることなら、この感動を名前、事件、戦いの暗記に嫌気がさしていた浪人生時代の私に教えてやりたい気分になります。

展示を楽しむために

こうした苦悩を乗り越えて、展示で何をみなさまにお伝えできるのか?やはり、わかりやすい内容とともに、戦国時代の最新研究の成果から、新たに発見されたことを伝えたいと思います。そして、歴史について、いろいろ考えてもらえるような機会になればとも思います。まずは、歴史を楽しむ、自分にも言い聞かせながら、日夜準備をしているところです。

(武藤 真)

フリールーム 10/21～11/30

なごやの発掘調査の歴史

南区にある見晴台考古資料館は、1979（昭和54）年の開館以来、見晴台遺跡のほか、市内の埋蔵文化財（遺跡）の発掘調査の実務を担当してきました。これまでに蓄積された調査成果をより多くの市民の方に見ていただくため、「なごやの発掘調査の歴史と見晴台」展と題して、博物館の2階常設展フリールームで展示します。

何が「重要な発見」なのか…

資料館がこれまで行ってきた発掘調査の成果は、一度にお見せできないほどの膨大な量であるため、今回は「重要な発見」に絞って紹介します。

ところで資料館や考古学になじみのない方には、発掘調査での「重要な発見」といっても、あまりイメージがわからないかもしれません。何が重要な発見なのか、そこから何がわかるのか、具体例を紹介しながら、展示の見どころをご案内します。

発掘調査の成果は様々な情報を持っており、切り口によって重要度も異なります。今回は、次の4つの観点から「重要な発見」を選びました。

①日本の歴史を考える上で重要な発見

西区・朝日遺跡からは日本最古の銅鐸どうたく鑄型が出土しました。

縦3.6cm、横3.0cmを測る、子どもの手のひらに収まるほどの小さな破片



朝日遺跡の銅鐸鑄型片

は、砂岩製です。一見ただの「石ころ」ですが、よく観察してみると、一つの面は滑らかな丸みがあり、斜格子文や、「無軸綾杉文」と呼ばれる互い違いの平行斜線文（くの字が連続するような文様）の刻み目が認められます。この面が銅鐸の表側を鑄造した鑄型の面です。

この鑄型は「菱環鈕Ⅰ式」と呼ばれる最古段階の銅鐸を鑄造したものと考えられます。この資料が示すように、弥生時代の代表的な遺物である銅鐸が最古段階から東海地方で作られたとすれば、「銅鐸は主に西日本で作られた」とするこれまでの考えを見直す必要があります。私たちが想像するよりも急速なスピードで、西日本の隅々にわたって青銅器生産の技術が広まったのかもしれません。新しい弥生時

代像にもつながる資料の重要度と、石ころ状の見た目のギャップに注目です。

②名古屋や尾張地方を特徴づける重要な発見

中区・名古屋城三の丸遺跡では、名古屋城の一面に建設された歴代將軍の霊を祀る御霊屋おたまや（靈廟）を飾った瓦が出土しました。第八代尾張藩主・宗勝の治世頃と見られる三葉葵文みつばあおいの瓦や龍モチーフの瓦は色鮮やかな釉薬が施されており、御霊屋は中国儒教スタイルの建物だったようです。江戸時代に尾張府下の鎮守を目的につくられた將軍家関連の施設の一つであり、江戸時代の尾張の特徴を示す資料です。瓦製作者の名前が記されている点も重要です。

③暮らしを復元する上で、重要な役割を果たす発見

熱田区・玉ノ井遺跡では縄文時代晩期頃の墓域を発掘調査し、葬られた人骨や土器棺などが多数確認されました。

出土した成人の人骨は全てが素掘りの墓穴に埋葬されており、全体が確認できるものはどれもが屈葬など身を小さく丸めた形で葬られています。一方で、土器棺内から見つかるのは幼くして亡くなったと推測される人骨です。この場所に住んだ縄文時代の人びとが埋葬のための規則を共有していた事実は、実に興味深いものです。土偶や、粘土や骨角で作られされた装身具なども出土しており、縄文人の精神世界の豊かさを私たちに想像させます。

④発掘調査史を語る上で欠かせない発見

見晴台遺跡では、市民参加による調査で太平洋戦争時の高射砲陣地に関する資料が出土しています。第13次調査が行われた1975（昭和50）年には、参加者から高射砲陣地跡も現代の遺跡であるという見解が示され、関心が寄せられるようになりました。今ではよく知られた「戦争遺跡」という概念を、全国でも先駆けて捉えていたことは重要です。

特に関心が寄せられるのは、アメリカ軍爆撃機B29のジュラルミン破片でしょう。聞き取り調査で知られていた「戦利品」が、展示してあったとされる陣地北東部で実際に出土したことに注目です。

今回の展示では、名古屋市内各所での「重要な発見」を材料に、これまでの発掘調査の成果を振り返ります。現在の名古屋の市街地や住宅地では、遺跡が存在することすらわかりませんが、この機会に遺跡を身近に感じていただければと思います。

（見晴台考古資料館 長崎千明）



感じる縄文時代

2014年12月13日(土)～

2015年2月8日(日)

主催 名古屋市博物館・

南山大学人類学博物館

およそ 5,000 年前の土器につけられた土偶 長野県内出土 名古屋市博物館

縄文時代って？

日本史の年表を見ると、旧石器時代、縄文時代、弥生時代という順にはじまっています。いちばん古い旧石器時代のつぎが縄文時代です。

「日本列島で、土器が使われ始めてから、米づくりが広がるまでの時代」。この展覧会、特別展「感じる縄文時代」では、縄文時代の範囲をこうしました。縄文時代より前の旧石器時代とは「土器をもつか、もたないか」で区別し、後の弥生時代とは「米づくりが広がっているか、いないか」で区別しています。

いまのところ、青森県の遺跡から出土した土器がいちばん古く、およそ 16,000 年前と測定されています。本格的な米づくりが伝わったのはおよそ 2,700 年前という考えがあります。この数字にしたがうと、縄文時代はおよそ 16,000 年前から 2,700 年前のあいだということになります。

縄文時代の環境

縄文時代の人々はどのような環境でくらしていたのでしょうか？ 一口に縄文時代といっても 10,000 年以上の長さです。ずっと同じだったはずがありません。

最後の氷河期でもっとも寒かったのはおよそ 25,000 年前。北アメリカやシベリアはあつい氷河におおわれました。日本列島の平野部がおおわれることはありませんでしたが、かなり寒くなり、平均気温がいまよりも 7 度ほど低くなり、名古屋周辺が現在の北海道の札幌や函館くらいの寒さ。そして、もっと乾燥した気候でした。

地球上の水分量は一定なので、氷河として水分が陸地にとどめられると、その分、海面が低くなります。そのころ、サハリンと北海道は陸続きになり、名古屋近くでは、伊勢湾や三河湾が底を見せ、海岸線は三重県の大王崎と静岡県のお前崎を少しだけ陸の方へカーブして結んだ線あたりだったのです。

そこから 11,000 年前くらいまでは急激に、それ以後はだんだんと暖かくなり(ときどき寒さのもどる時期もありましたが)、6,000 年ほど前、いまより 2 度ほど気温の高いもっとも暖かい時期となり

年代は、放射性炭素年代測定法によって得られた年代を年輪年代などと比較して算出した較正年代を「～年前」で示しています。

ます。このときには伊勢湾が岐阜県大垣市近くまで奥深く入り込んでいたようです。

4,400 年ほど前から再び気温が下がりはじめ、縄文時代の終わりころには現在と比べてやや寒い気候となるのです。

ナウマンゾウなどの大型の動物が姿を消し、イノシシやシカなど中型の動物が多くなっていくのが 16,000 年前ころと考えられています。樹木は寒い時期の針葉樹林から木の実をつける広葉樹林に変化していきます。

うつりかわる環境のなかで、縄文時代の人々はさまざまな工夫をして生きていました。住まいを定めるようになったのは縄文時代の初めのころ。実のよくなるクリの木をえらんで世話をしたり、狩りにイヌをつかったりといったこともしていました。現代のわたしたちが「わかる、わかる」と感じることもたくさんあります。ちょっと理解しにくいこともないわけではありません。くわしくは展覧会をご覧いただくとして、ここでは、そこでとりあげる話題をいくつかご紹介することにしましょう。

縄文土器 芸術品？ 道具？

縄文時代という時代の名まえの元となった縄文土器。いまから 150 年ほど前の明治時代に、はじめて発見された土器に縄目のもようがつけられていたので縄文土器とよばれるようになったのです。

力強く立体的な造形をもつ縄文土器は、「日本美術のあけぼの」として位置づけられています。芸術作品としての魅力をさいしょに見いだしたのは、1970 年に開催された大阪万国博覧会の「太陽の塔」や「芸術は爆発だ！」などのことばで知られる芸術



およそ 7,000 年前の土器

土器の上の方にはストローのような道具でつけたもよう(竹管文)が、下の方には縄目のもよう(縄文)があります。

千葉県松戸市・二ツ木貝塚
南山大学人類学博物館



およそ 4,500 年前の土器
立体的で大きなかざりが
炎を思わせるので「火炎型
土器」とよばれています。
信濃川流域中心に見つかっ
ています。表面の複雑なも
ようは粘土ひもをはりつけ
てつくられています。
出土遺跡不詳
名古屋市博物館

家、岡本太郎さん。1950 年代はじめ、たまたま東京国立博物館で見たのがきっかけだったそうです。

展覧会では、立体的で複雑なかたちのものからシンプルなものまで、縄文土器が見せるさまざまな表情をお楽しみいただきます。

ところで、縄文時代の人々にとっては縄文土器は「道具」でした。そのおもな役割は「なべ」。イノシシやシカの肉、貝や魚を煮たり、しぶくてそのままでは食べることのできないドングリ類や野草をゆでてしぶ味をとるのに使われました。

美術史の本のはじめに写真がのせられていることの多い火炎型土器。内側に黒いオコゲがこびりついたものが遺跡から見つかっていて、実際に煮炊きにつかっていたことがわかります。大きなかざりがじゃまになって、とてもつかいにくそうなのですが……。火炎型土器も縄文時代の人々にとっては「なべ」だったのです。

石器は部品

狩りには弓矢、木をきるためにはオノ、というように縄文時代の人々もいろいろな道具をつかっていました。しかし、こうした道具がそのまま見つかることはあまりありません。木や動物の皮などでつくられた部分は、長い間、土に埋まっているうちにくさってなくなってしまい、石でつくられた部分だけしか残らないからです。いま、わたしたちが見る石器の多くは、縄文時代の人々がつかっていたいろいろな道具の刃なのです。そう、石器は部品なのです。

弓矢のうち、弓は全体がくさってしまう材料でつくられるので、残ることはあまりありません。矢の先端につけられる「矢じり」は石でつくられます。2cm くらいのたいへん小さな石器ですが、えものとなる動物のからだに刺さるように、するどくとがらせてつくっています。わたしたちはこの小さな矢じりで縄文時代に弓矢がつかわれていたことを知る



- おめぐら
いかすち
- ①長野県長和町・男女倉遺跡
 - ②名古屋市緑区・雷貝塚
 - ③パプア・ニューギニア
 - ①②名古屋市博物館
 - ③南山大学人類学博物館

①矢じり(およそ 5,000 年前) 実物大

②磨製石斧(およそ 3,000 年前)

③オノ(現代)

石器は①や②のように柄のない状態で見つかることがほとんどです。磨製石斧は、右の写真のような木の柄にとりつけられていました。この写真のオノ(③)は 1960 年代にパプアニューギニアでつかわれていたものです。竹をあんで刃(磨製石斧)を固定しています。

のです。木をきったり、加工するためのオノの先につかわれたのは磨製石斧。役割に応じていろいろな大きさのものがつくられ、いろいろなかたちの柄につけられました。パプアニューギニアのオノを見ると「石器は部品」がよくわかりますね。

この展覧会では、現在の研究成果にもとづいた縄文時代のイメージを楽しく「感じて」いただけるようにしたいと思っています。それで「感じる縄文時代」というタイトルをつけました。

縄文時代を楽しく「感じて」いただくために、展覧会だけでなく、いくつかのワークショップを準備し、リハーサルも始めています。下の写真は、縄文時代の人々がどのように土器のもようをつけていたのか、実際に縄文土器をよく見て、ときにはさわりながらさぐっていきこうというワークショップです。ほかにもいろいろご用意しています。お楽しみに！

*ワークショップは事前申込み(応募多数の場合は抽選)となります。また、ここでご紹介した内容が変更になることもあります。

*展覧会の詳細およびワークショップの申込み方法や内容の詳細は展覧会のチラシ、博物館公式サイトなどで順次ご案内いたします。

ワークショップの
リハーサル

土器を見ながら、土器のもよのつけ方をいろいろためしています。南山大学人類学博物館で。



極楽に往くための絵

「極楽浄土」とは「阿弥陀如来」という「^{ぶつだ}仏陀」を主とする「^{ぶつこくど}仏国土」の一つです。仏教の世界観では、この世界には仏教の教祖である釈迦以外にも多くの仏陀が存在し、仏は神通力でそれぞれ自らの仏国土を創造することが出来ると考えられています。我々の住む「この世」は様々な苦しみに満ちていて、衆生は落ちていて仏道修行に励むことが出来ません。そこで、清浄で安らぎに満ちた別の仏国土に生まれ変わり、仏陀に教えを受けようという「往生」の思想が生まれました。海外の巨大な寄宿制の学校に留学し、そのまま永住するようなものでしょうか。数多くの仏国土がある中で、往生するための道筋が最も整備されているのが、阿弥陀如来の極楽浄土です。

往生する基本的な方法は、①在世中に善行を施して徳を積み、②極楽へ往生するイメージトレーニングを重ね、③臨終の際まで意識をはっきり保って、お迎えに来てくれる（^{らいごう}来迎する）阿弥陀如来の姿をくっきりとイメージすること、です。むむ、なかなかハードルが高いかも。ちなみに、口で唱える念仏は、法然以前は補助的な行でした。

極楽浄土と来迎の姿を描いた絵画は、イメージトレーニングの重要なアイテムです。極楽往生は人生でワンチャンス限り。成功確率を上げるために、様々な図柄が考案されました。極楽浄土と、イメージトレーニングのプログラムを描く「^{たいまんだら}当麻曼荼羅」、盛大なお迎えのパレードを描く「^{しょうじゅらいごうず}聖衆来迎図」、山にかかる夕日と阿弥陀如来を重ね合わせた「^{やまごえあみだず}山越阿弥図」などなど枚挙にいとまがありません。

「二河白道図」もその一つです。「二河譬」という^{ひにが}譬喩を絵画化したものです。西に向かう旅人が、川幅百歩ほどの水の河、火の河に突き当たります。河と河の間に幅四、五寸ほどの細い白い道があるものの、危なくて渡れたものではありません。立ちすくむ旅人を見つけて、盗賊や獣が襲いかかろうとします。絶体絶命のそのとき、旅人の耳に、進む決心を勧める声が東と西から聞こえてきます。決めた旅人は、盗賊が引き留める声には耳を貸さず、白い道を渡り切ります。水の河と火の河は欲望や怒りなどコントロールできない自分の感情、盗賊・獣は悪い環境、東岸は現世、西岸は極楽、東の声は釈迦如来、西の声は阿弥陀如来を意味しています。

「二河白道図」にも極楽や河、盗賊などの配置に様々なバリエーションがありますが、この蓮光寺本

は主題であるはずの水の河や東岸の描写が比較的あっさりしていて、白道を渡った先で極楽浄土を旅するように道が続いて描かれる事と、壇上の阿弥陀如来が斜め向きに描かれている事が特徴です。阿弥陀如来が迎えにくる来迎図では斜め向きはよくありますが、極楽浄土にいる姿で斜めを向くのはめずらしい構図です。なお、来迎図が右斜めを向くのは、臨終を迎える人が北枕で西を向いて横たわり、薄目を開いたときに阿弥陀如来と視線が合いやすいようにといわれます。

蓮光寺本では釈迦如来の姿は描かれませんが、二河白道図のバリエーションの中には、旅人を励まして送り出す（^{ほっけん}発遣する）釈迦如来と、迎え入れる（^{ごうしょう}迎接する）阿弥陀如来に重心を置く構図のグループもあり、さらに一歩進むと、河や旅人といった物語要素を排除して、祐福寺本「遣迎二尊像」のように、この発遣迎接二尊の姿のみを描くものもあります。祐福寺本では指先のかたち（印形）のわずかな違いをのぞき、虚空に直立する二尊をほぼ同じ姿で描いています。二尊は同等であり、送る、迎えるという役割にも本質的な違いはない事を示すのでしょう。

常設展テーマ10では10月15日（水）から11月30日（日）まで「郷土の仏教美術」と題して館蔵・寄託品の仏画を中心に、この地方に伝わる仏教美術の優品を紹介します。展示室で、むかしの人々が極楽往生と仏の救いにかける様々な思いを感じ取っていたできれば幸いです。（山田伸彦）



（左）二河白道図

津島市・蓮光寺蔵 重要文化財 鎌倉時代
（10月15日（水）～11月3日（月）展示）

（右）遣迎二尊像

東郷町・祐福寺蔵 県指定文化財 南北朝時代
（11月5日（水）～11月30日（日）展示）

常設展 話題のコーナー

「水とくらし」とESD

11月10日～12日、「持続可能な発展のための教育（ESD）に関するユネスコ国際会議」が名古屋で開催されます。ESDとは、未来に向かって安心して暮らし続けられるよう、「持続可能な発展」のため、環境や開発、平和や人権等の身近な問題について学び、活動することを意味するということです。

当館の活動も、過去の人々のあゆみを通じて、現在・未来を考える手がかりを提供することを目指しており、ESDとも深く関わります。そこで、この機会にあわせ、ESDのテーマとしても取り上げられる「水」の問題を考える展示を予定しています。安全な水をいかに確保するかは、身近な問題であると同時に世界的な問題でもあります。また安定した社会を築いて行く上で欠かせない条件であることは時代を問いません。展示では江戸時代を中心に紹介しますが、ここでは、長期的な観点から、この地に暮らした人達の「水」を確保するための努力を紹介し、博物館とESDとのかかわりについて考えます。

江戸時代の上水

現在の名古屋市の中心部は、標高10m程の台地上に築かれています。標高が高く、水害の被害が少ない反面、水を得るためには努力が必要でした。

この台地に暮らした人々がどのように水を確保したかについて、江戸時代の様子は比較的良くわかっています。台地上の発掘調査では、江戸時代以降の井戸が数多く見つかっており、生活用の水は井戸から得ていたと見られます。ボーリング調査の結果によると、水を得るためには、地表面から約10m掘り下げる必要があったようです。

台地西側の低地では、地下水の水質が悪く、「巾下水道」と呼ばれる上水道が敷設されたことはよく知られています。この施設に関しては、発掘調査も行われており、当初の敷設工事に加え、木や竹の水道管の付け替えや修繕等の日常的な維持管理にも大変な労力が注がれていたことがわかっています。



白川公園遺跡の井戸（文化財保護室提供）

中世以前の水とくらし

ではそれ以前の人たちは水をどのように確保したのでしょうか。台地上では、鎌倉時代・室町時代の井戸は見つかっており、中世の人も井戸を掘って飲料水を確保したようです（中世の井戸は江戸時代の井戸より約1m浅いというデータがあります）。

問題なのは平安時代以前で、台地上では平安時代の井戸が1基見ついているくらいで、それ以外の施設は全く見つかっていません。名古屋市より北の沖積低地では弥生時代から井戸が掘られていますから、井戸を掘る知識はあったと思われますが、台地の固い地盤を水が湧くまで掘り下げることが困難であったのだと思います。

現在でも台地と低地の境界付近で水が湧いているところがありますが、古代以前の人たちはその湧き水を使ったとも言われています。台地上では古代以前でもかなり人口が多かった時期があり、それで十分であったのか疑問は残ります。もちろん、湧き水の量は様々な条件で変化しますから、古代の湧水量は現在より多かったという可能性も考えられます。

日本列島の歴史の中で、人と水との関わりが大きく変化したのは弥生時代であると言われます。この時代には水田稲作が始まり、水の確保・管理が重要となったことは疑いありません。また井戸も掘られるようになり、井戸やその水が神聖視されたと見られる事例も見られます。名古屋では、遺物が多く出土する集落跡に調査が集中し、水田や台地直下の低地部にはあまり及んでおらず、こうした変化を具体的に知ることはできません。名古屋の台地では弥生時代にも大きな集落が営まれていますから、その人たちと水との関わりは今後検討が必要です。

「水」がつなぐ過去と現在・未来

名古屋の台地に暮らした人々が水をどのように得ていたかを概観しました。古代以前はまだ課題を挙げることはできませんが、「水」という身近な問題は、長期的な視点で取り組むことができるテーマであることはご理解頂けたかと思います。そして、その長期的な人間の営みに対する理解は、その到達点としての現在、更には未来を考えるヒントになるでしょう。「水」という具体的なテーマを考えると、博物館がどのようにESDに貢献できるかも見えてきます。

（村木誠）

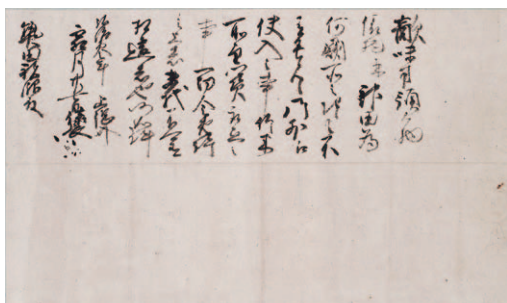
常設展にて、話題のコーナー「水とくらし」開催。10月21日～11月30日。

新収資料紹介

織田信長判物・織田信雄判物 二通一巻

弘治3年(1557)・天正12年(1584)
熱田区 大周寺寄贈

今回紹介する信長とその息子・信雄の文書は、いずれも存在自体は江戸時代から知られていたが、原文書の行方は未詳であった。今回、この原文書2通が、卷子1巻に成巻された状態で発見されたのである。

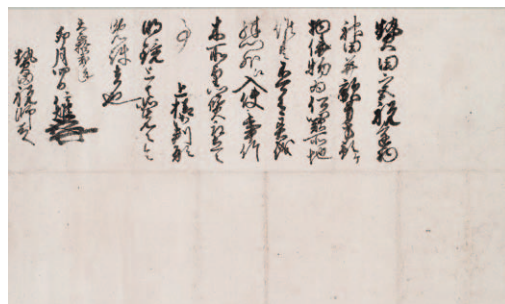


織田信長判物 弘治3年(1557)11月27日付

敵味方預ケ物・
俵物并神田・為
何關所之地候共、不
有異見候、門外江
使入候事、竹木
所望・郷實取立之
事、一切令免許
之上者、末代不可有
相違者也、仍如件、
弘治參年 上総介
霜月廿七日 信長
(花押)
熱田祝師殿

まず信長判物から見ていきたい。本紙縦25.1cm、横41.6cm、表装時の裁断を考慮に入れても「天下布武」で有名な信長の印判状に比べ一回り小ぶりである。料紙を横に二つ折りにした折紙の形式で、宛先の熱田祝師は、熱田神宮の神官で大宮司家に次ぐ権宮司家であった田島家の当主・田島仲安を示す。

内容は、敵味方の預け物や神田などに関わる田島家由来の權益を保障するもの。この判物が出されたのは、信長の父・信秀没後の後継者争いが激化した時期である。信長は当時弱冠24歳。この頃、当主が代々名乗っていた官途名「弾正忠」を、弟の信勝(信成)が名乗り始め、現当主である信長の地位をおびやかす存在になっていた。前年の弘治2年(1556)8月、信勝は信長の宿老を擁して反旗を翻し、稲生(現名古屋市西区)で信長軍と交戦して敗退した。信長は一旦信勝を許すが、その後も信勝は敵対する動きを続ける。それをうかがわせるのが、上の信長判物と同時期に熱田の有力商人・加藤家宛に発給された、信成と改名した信勝の安堵状である(11月25日付織田信成判物 加藤文書)。また、信長



織田信雄判物 天正12年(1584)4月4日付

熱田宮祝重物・
神田并敵身方預ケ
物・俵物・為何關所地
候共、不可有異儀、竹
殊門外江入使之事、竹
木所望・郷實取立之
事、上様御判形
明鏡上者、如先々令
免許者也、
天正拾貳年
卯月四日 信雄(花押)
熱田祝師殿

自身もこの判物とほぼ同文の・同日付の熱田^{けんぎょう}検校・馬場家宛判物を発給しており、こちらは原本の存在が古くから知られていた(11月27日付信長判物 熱田馬場家文書)。馬場家は、田島家と並び熱田宮を支える権宮司家である。このように、織田家の後継者争いが激化した時期に頻出する熱田関係の安堵状は、織田家の領域支配において熱田がいかに重要な位置づけをされていたかを物語る。

また、点が散らばったような花押は、信長が20歳の頃の特徴的なものである。中でも当文書のように、中央に縦線が長めの口形で書かれるのは弘治2～4年頃のわずかな期間で、原文書の遺例は片手にも満たない。信長がまだ一族統一も成しとげ得ていない時期の文書は、数も少なく大変貴重である。

次に信雄判物を見よう。本紙縦28.5cm、横45.4cmと、信長判物に比べ幾分大きく、折紙の形式である。信長の次男である信雄が家康と共に秀吉と交戦した天正12年の小牧・長久手の合戦のうち、4月9日未明に起こった長久手での戦闘直前に発給されたものである。内容は前の信長判物の内容を踏襲して安堵するもので、信長後継者としての立場を主張した意図が明白である。信雄が同戦に先立ち、信長以来の熱田支配の確認・強化を重視していることが分かる。

この両通を合わせ見ると、熱田支配が織田家後継者の要件になっていたことが解る点でも興味深い。末筆ながら、広く公開と保存を願われた御寄贈者に敬意を表し、心より感謝申し上げる。(岡村弘子)

この資料は10月25日(土)～11月30日(日)開催の特別展「三英傑と名古屋」で展示します。